

あ。う。る

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 30

出身地が違い、郷土愛などない
流民の地だった北海道に
一体感が生まれたキツカケは、
日清戦争への屯田兵出兵だった。

日清戦争と北海道

明治二十七年（一八九四）年八月一日、日清両国の間で宣戦布告がなされ、「日清戦争」が勃発。明治維新後、我が国初の対外戦争であり、この戦争以後にわかに言われ出したのが、「挙国一致」のスローガンだった。政府と野党の対立もピタリとやみ、そのパワーは挙げて外へと向けられた。

しかし、開戦と同時に北海道を覆ったのは、不景気と物価高であった。その原因は、本州―北海道間の主力定期船が徴発されたことにあった。当時、北海道の移出入はすべて船に頼ったものだったため、大打撃となったのだ。

物価も上昇の一途をたどった。同年十月から翌年三月まで、海上運賃は三割も値上がりし、道内各地の倉庫には行き場を失った農水産物がうず高く積まれていた。

漁場の親方も金繰り難に加え、働き手である漁夫の多くが軍隊に召集されたため、人集めに高い賃金が必要となり、青息吐息であった。二十八年春の道内のニシン定置網数は、例年の三分の一に激減したという。

屯田兵に動員令

そんな北海道で日清戦争の主役を務めたのが、明治二十八年三月に出征の動員令が下った屯田兵だった。

当時、屯田兵の数は二二兵村三六中隊で四千人を超えていた。この屯田兵に加え、本州で現役を終え、予備役・後備役中に北海道に移住してきた者にも動員がかかり、

